



「がんは人生を二度生きられる」
これは、僕が2016年に出版した本のタイトルです。

がんを診断され落ち込んでいる人に、この言葉を送っています。「がんになったら人生は終わり?」とんでもない。がんになっても、6割の人は10年後も生きています。ここから新たな人生の幕が開くのです。がん患者になったからといって、がんが死ぬわけではないからね」と付け加えます。

この偉大な音楽家も人生を二度生きた人、なのかもしれません。世界のオザワとして知られた、指揮者の小澤征爾さんが2月6日、都内の自宅で亡くなりました。享年88。死因は心不全との発表です。小澤さんは2005年に白内障の手術

344 指揮者 小澤征爾



を、そして2010年には食道がんと診断され、食道全摘手術を受けました。74歳のときでした。

がんの手術が成功したとて、全摘手術となれば高齢になるほどダメージは大きい。オーケストラの指揮者には相当な体力が必要で、一度の公演で2〜3時間も体重が落ちてしまうという話を聞いたこともありま

す。だからもう、小澤さんは術後に表舞台に立つことはないかもしれない……当時、そんな不安が過(よぎ)りました。

しかし、多くのクラシックファンの願いに答え、小澤さんは7カ月の闘病を経て、再びタクトを振りました。復帰記者会見で小澤さんは、「気管を切り開いたので話しづらい。食道をとって胃を持ち上げた結果、15⁺痩せた。まだ少量を1日に4、5回に分けて食べる状態」と本調子でないことを明らかにしながらも、「(今日が)第二の人生の1日目。これから変われるとしたら、より深く変わりたい」とその喜びを語っていました。

この記者会見は、多くのがんサバイバーを勇気づけました。人生を二度生きるためには、具体的な目標を持った方がいいと小澤さんが指し示してくれたのです。

小澤さんはその翌年には、腰痛が悪化して手術。そして2018年には大動脈弁狭窄(きょうさく)症を発症して手術を受けています。これは、食道がん手術の後遺症として起こる場合が多々あります。どんなに生活に気を付けて

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

いても、避けられない合併症もあります。それでも小澤さんは、指揮者を「休む」ことはあっても「やめる」ことはなかったのです。

小澤さんの訃報を受けて、テレビでは過去の演奏を特集して流していました。病を得てお痩せになられた後でも、そのオーラは変わらず、むしろ迫力は増していました。クラシックに疎い僕であっても、つい最後まで聴いてしまっほどの素晴らしいパフォーマンス。

人間の魅力とは若さでも体力でもなく、蓄積された経験と、ほとぼる情熱。二度目の人生も完全燃焼で終えられたことでしょう。

一度目の人生も完全燃焼